

台湾人日本語学習者の連濁意識について —銘傳大学学生を対象として—

中澤信幸 (山形大学) ティモシー・J・バンス (国立国語研究所) アーウィン マーク (山形大学)

1 背景と目的

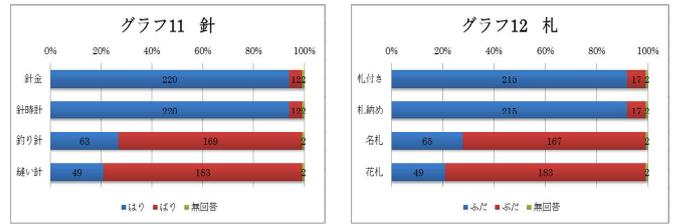
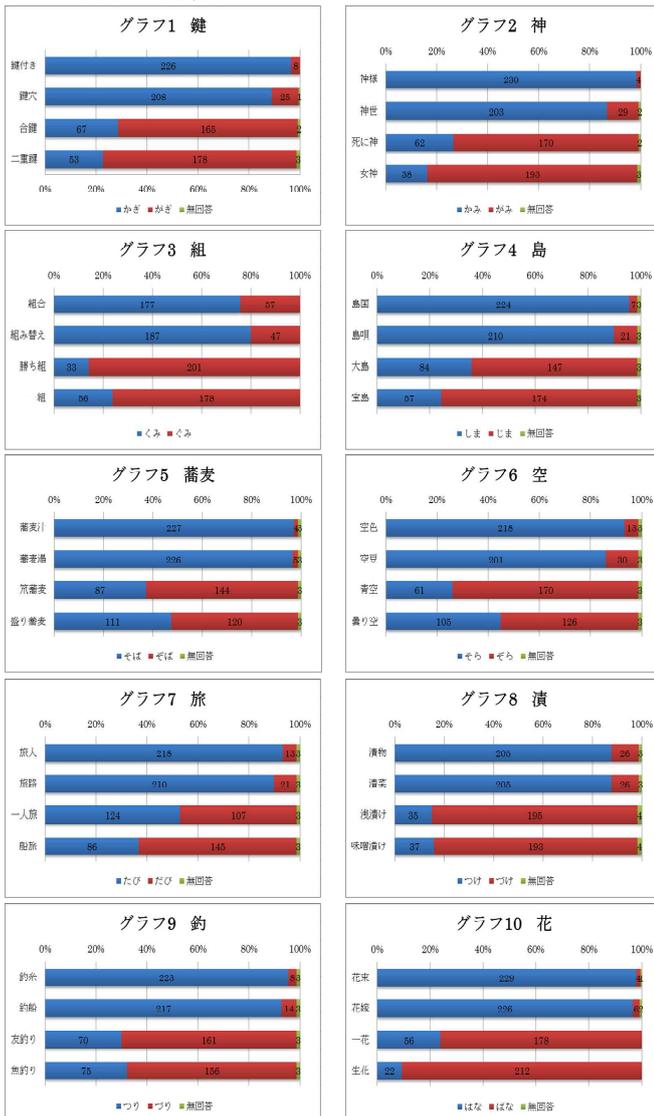
日本語を学習する日本語非母語話者にとって、漢字の読みなどの発音習得は困難な課題である。一方、連濁は、いまだにその法則性が充分には見出されていないところもある。それでは日本語学習者たちは、漢字の読みにおける連濁をどのように捉えているのであろうか。本研究は台湾・銘傳大学の日本語学習者を対象に、その連濁意識について調査し、日本語教育における連濁の法則性について考察する。

2 調査対象と期間

- 調査対象—台湾・銘傳大学の日本語学習者 234 名
大学生 225 名、大学院生 9 名
日本語学習歴 1 年以内 11 名、2 年以内 84 名、3 年以内 79 名、4 年以内 39 名、5 年以内 8 名、5 年超 12 名、無回答 1 名
- 調査期間 2014 年 5 月 13~16 日

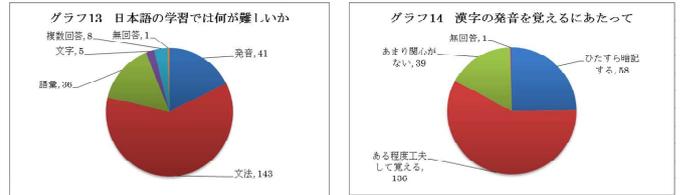
3 アンケートの内容と結果

3.1 漢字の発音について



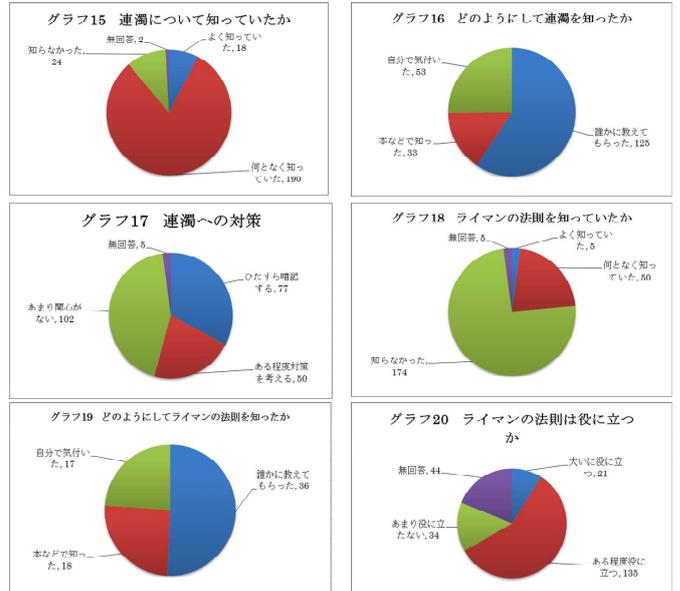
- どの語も一様に、前部要素—清音のまま、後部要素—濁音化、となる傾向がある。
- 「鍵」「蕎麦」「旅」「札」など「ライマンの法則」に該当する語も、他と同様。後部要素の濁音連続は気にならない？ (中国語には清濁の区別なし。)

3.2 日本語の発音学習について



- 日本語学習者にとっては何よりも文法が難しく、発音はそれほど重視されていない。
- 漢字の発音を覚えるために、何らかの工夫をしている学習者が多い。

3.3 連濁について



- 日本語学習者は連濁の存在は知っているものの、あまり関心があるとは言えない。やはり文法など他の要素に気を取られているか？
- 「ライマンの法則」は日本語学習者にはあまり知られてなく、教育にも生かされているとは言えない。

4 web サイト

アンケートの全文 (PDF ファイル) および調査結果のデータベース (Microsoft Excel ファイル) は、次の web サイトでご覧いただけます。

Nobuyuki NAKAZAWA Website

http://www7b.biglobe.ne.jp/~nob_nakazawa/